九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

武谷椋亭の足跡 ： 武谷文庫からみる幕末福岡藩の医事

赤司, 友徳
九州大学文書館 ： 准教授

https://doi.org/10.15017/4751324

出版情報：貴重文物講習会. 44, pp.1-, 2021-01-26. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

第44回九州大学附属図書館貴重文物講習会
於：九州大学中央図書館きゅうとコモンズ
2022年1月26日

武谷椋亭の足跡
―武谷文庫からみる幕末福岡藩の医事―

赤司友徳（九州大学大学文書館）

はじめに

❖武谷椋亭（祐之、1820ー1894）について【表1】
・武谷水城「贈従五位武谷祐之小伝」（1924年）
・井上忠氏による椋亭宛書簡および自伝『南柯一夢』（全3巻、1893年）の紹介

❖武谷家と九州大学
・椋亭が関与した賛生館を九州大学（医学部）の源流／前史として位置づけ
・武谷廣（第二内科初代教授）、健二（第15代学長）、止孝（名誉教授）氏らをはじめ多数の九大関係者を輩出

はじめに

❖武谷文庫について

・水城〜止孝氏による武谷家蔵書・史料の整理、目録化

・1945年5月、止孝氏より附属図書館に寄託→1971年返却

・その後未返却分について、2020年12月本学との間であらためて寄託契約締結

❖武谷文庫の学術的価値の高さ

・従来の伝記を裏付ける重要な一次史料群

・19世紀日本の医学史・科学史・地域史・教育史、九大史等の研究に寄与

はじめに

❖本日の内容について

１．椋亭の足跡（１）―適塾入門～藩医への登用

２．椋亭の足跡（２）―御匙医筆頭へ

３．賛生館の設立とその機能

↓↓

自伝『南柯一夢』の見せ場を中心に、武谷文庫所収の史料をもとに椋亭の足跡を具体的に紹介。椋亭の事績をふまえ、幕末福岡藩の医事行政（の確立）についてあらためて考えてみたい

１．椋亭の足跡（１）―適塾入門～藩医への登用

❖武谷元立（1785-1852）：代々医業を営み、鞍手郡頭取医

・文政8年（1825）年、シーボルト門下の児玉順蔵が寄宿

翌年、江戸参府途中のシーボルトと面会

・文政10（1827）年、有吉周平、百武万里、原田種彦らとシーボルトに入門

・文政11（1828）年、御目見医（藩医）に抜擢

・天保5（1834）年、黒田長溥（斉溥）の藩主就任

→長溥は西洋の学問に強い関心、それにもとづく藩政改革を実施

・天保12（1841）年、博多大浜にて百武万里とともに福岡初の人体解剖（腑分け）を実施

→武谷水城『百武万里伝』【史料7】　※以下、史料はすべて電子展示の史料番号

1．椋亭の足跡（1）—適塾入門～藩医への登用

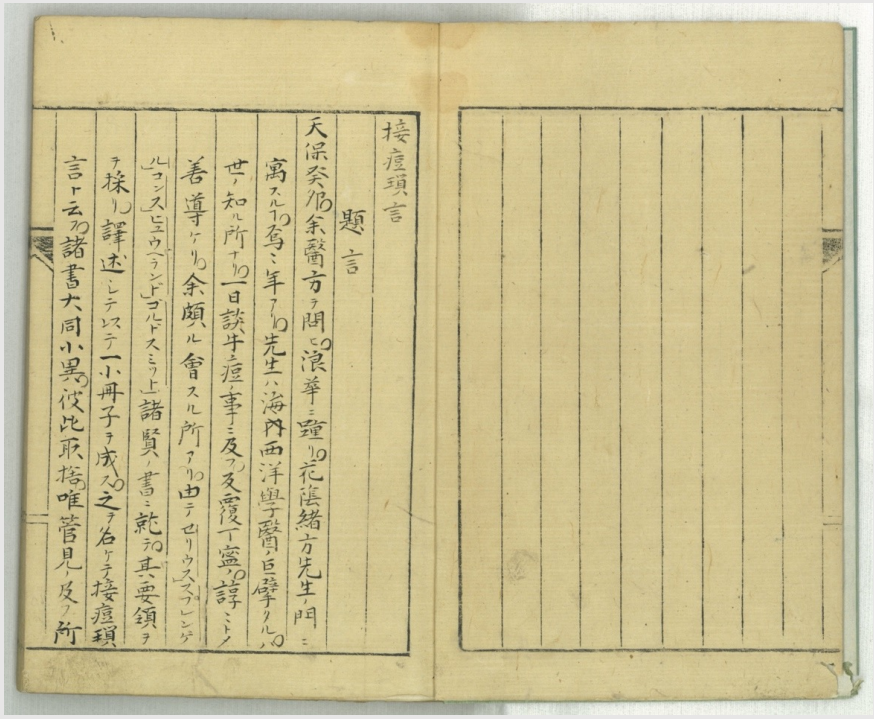
❖武谷椋亭

・天保14（1843）年、緒方洪庵の適塾に入門

・弘化3（1846）年、『接痘瑣言』【史料14】を訳述

・嘉永元（1848）年、退塾。

　帰国後、父・元立が高齢のため頭取医助勤に


接痘瑣言

題言

天保癸卯余醫方ヲ問ハン浪華ニ種痘ノ花蔭緒方先生ノ門ニ寓スルヲ為ニ年ヲ以テ先生ハ海内西洋學ヲ學ブ巨擘ナルハ世ノ知ル所ナリ一日談牛痘事ニ及フ反覆丁寧ノ諄ミトク善導ケリ余頗ル會スル所アリ由テセリウスプレンゲルヨリスヒヤウランドコルドスミヲ上諸賢ノ書ニ就テ其要領ヲ採リ譯述シテ以テ一小冊子ヲ成ス之ヲ名ケテ接痘瑣言ト云フ諸書大同小異彼此取捨唯管見ノ及フ所

１．椋亭の足跡（１）―適塾入門～藩医への登用

・嘉永2（1849）年10月、藩主長溥による種痘事業の開始

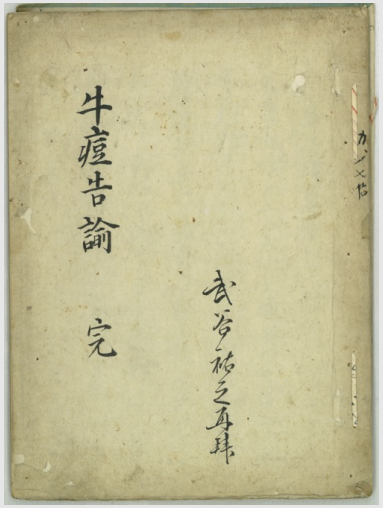
→7月、蘭館医モーニッケが種痘所を長崎に開設。8月、佐賀藩医楢林宗健が牛痘種痘を実施。10月、江戸佐賀藩邸にて伊東玄朴が実施

・同年11月、長溥は江藤貫山（内科兼小児科）・安田仲元（鍼科）を連れ、長崎にて牛痘苗（ワクチン）を入手

→同時期に椋亭が種痘を実施

詐欺横行により、郡奉行が江藤・安田以外に施術禁止を布達

1．椋亭の足跡（1）—適塾入門～藩医への登用



・同年末、椋亭が『牛痘告諭』【史料16】を自費出版

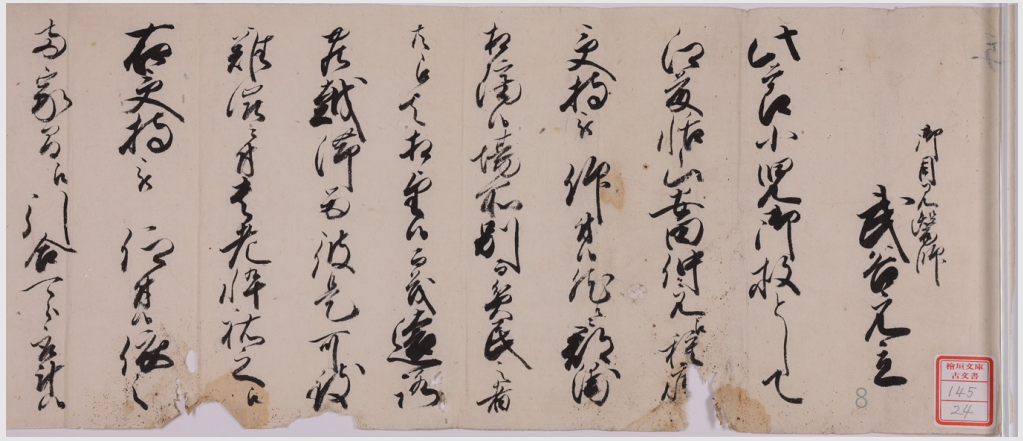
→国学者伊藤常足の添削。藩に献納し、郡奉行を通じて藩内に配布【史料44、写真上段】

・嘉永3（1850）年3月、種痘医を1郡1名置くことを布達

→遠隔地での施術困難であるため（のちに御匙医も実施）

この時、元立が椋亭を種痘医に推挙

【史料45、下段】



１．椋亭の足跡（１）―適塾入門～藩医への登用

・安政元（1854）年10月、長溥と初対面

・同年11月、黒田家家老野村隼人の臣下を診療

→江藤貫山と問答、蘭館医の診断・処方と比べて遜色なし。「公、予が答の卓爾たるを深く御感賞ありしとなり」（『南柯一夢』巻一）

・安政2（1855）年1月、「三人扶持被下御城代組に被差加」および精錬方御用（製薬部門担当）

黒田長溥
wikipedia掲載画像

２．椋亭の足跡（２）―御匙医筆頭へ

・安政2（1855）年2月、平勤御納戸組医。同僚に同名がいたため椋亭と改名（家督相続以来「元立」）

・同年9月、オランダ本国軍艦が長崎来航。長溥の視察につき、椋亭が御供

→平勤で御供の先例がなく「御匙助」に

→商館医より医学・理化学器械を購入

・同年10月、「御月番〔野村〕隼人殿より御匙役被仰付」

→長溥の大腿部発瘡の治療に当たる（ひと月余りで治癒）

※匙医･･･藩主およびその家族の診療を行う医師。侍医

２．椋亭の足跡（２）―御匙医筆頭へ

・安政3（1856）年8月、長溥の御供医師として江戸参府（翌年3月まで）

① 江戸において著名な蘭学者（宇田川興斎、戸塚静海、川本幸民、箕作秋坪、松本良順ら）らと交流

⇒適塾人脈を土台に学術交流、親交を深める＝のちに福岡藩の後進育成や殖産興業事業に活用、他藩学者の基礎研究を支援（後述）

→安政3～4年、椋亭の推挙により藩医の篠田正貞、青木道琢、原田水山、塚本道甫、古川俊平、岡正節らが蘭学修行へ

② 藩主家および親戚家、在江戸藩士らの診療活動

→①を通じた診療の質の向上

⇒医師としての実績・評価の獲得、長溥の信任もより厚く

２．椋亭の足跡（２）―御匙医筆頭へ

・安政5年9月、御匙医筆頭に就任

→藩医の進退、全国医師の監督、御目見得医の推挙、月例の御用会主宰など

・安政6（1859）年、『舎密便覧』の刊行

→河野禎造によるオランダ人薬剤師ホメス『定性分析表』翻訳。化学実験の図解、化学変化や試薬等の色彩を図示

→椋亭宛宇田川興斎書簡（安政4～6年、井上1958所収）：校訂を行った興斎の強い関心、基礎研究への貢献を確信

２．椋亭の足跡（２）―御匙医筆頭へ

・安政5（1858）年夏、コレラ流行

→①ポンペの小冊子写の提供／②江戸での流行状況／③蘭方医学の面目躍如／④治療薬の準備

「①コレラ病長崎ヨリ流行致候付ポンペより書上候小冊御写し被下置候段難有仕合不堪感載之至候。ポンペ之説之如ク果して②此地も先月中旬よりふと相始り始メハ築地八丁堀辺殊ニ赤坂辺尤盛ニ御座候。〔中略〕死人も夥敷茂早数万に及候趣何とも言語ニ絶し候。〔中略〕③夫故此度ハ蘭宗はいづれも略コレラ之義も存居候義何となく評判も宜く、市中一同此度の病気は蘭に限候など申、殊に麹町辺に而は名主より触を出し蘭家へ療治相頼候様にと申事ニ而御座候。扨右之様子ニ候へとも何分劇症ニ至候而ハ万死を一生ニ回す様ニハ参リ不申、実ニ酸鼻之至リニ而候。④就而早速御申越の薬も御側へ為用意製し置申候」（安政5年8月21日付椋亭宛箕作秋坪書簡、井上1957所収）

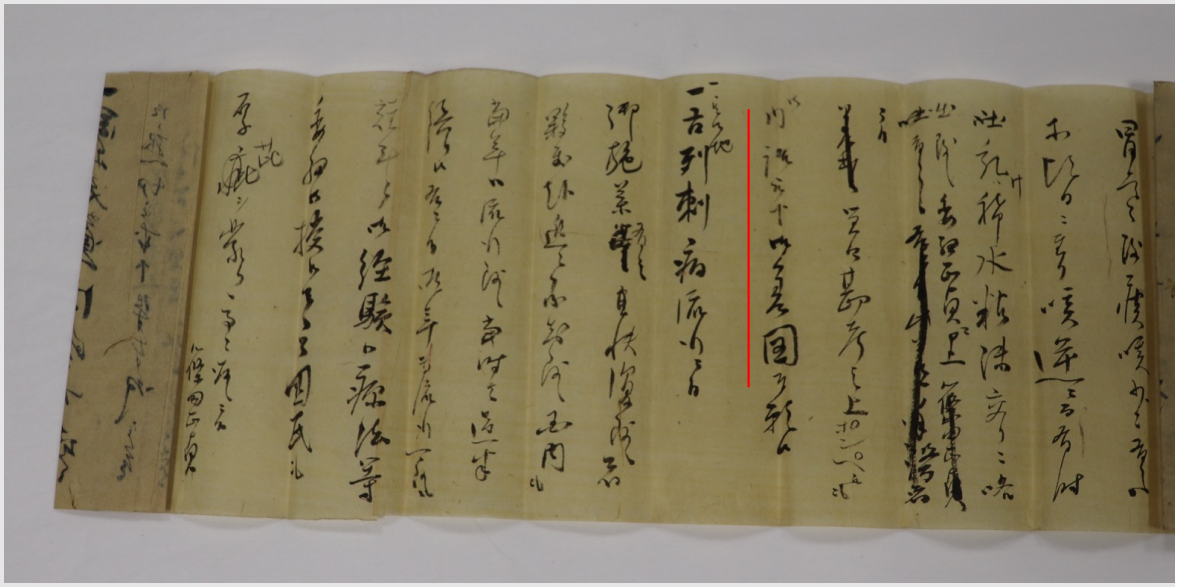
２．椋亭の足跡（２）—御匙医筆頭へ

・安政5（1858）年夏、コレラ流行

→「虎狼痢始て我邦に入り大に流行せり。福岡博多にて五百余人の死亡たり」

①「口上手控」【史料47】：

松本良順宛？コレラ治療について相談



② 9月15日付椋亭宛洪庵書簡:

椋亭によるコレラ対処法の質問に
対する返答。
『虎狼痢治準』【史料25】
および症状の段階に応じた処置の要点を説明

⇒椋亭は人脈を駆使してコレラ対策に腐心⇔蘭学者らの相互協力

２．椋亭の足跡（２）—御匙医筆頭へ

❖精練方御用として

・製薬（肝油、サントニン等）や実験器械の製作、　『舎密便覧』出版事業を監督

・長崎での洋書、薬品の入手

　⇒福岡藩の優位性（長崎警備の役得）、長溥の人脈を駆使し、洪庵をはじめ宇田川興斎、戸塚静海、川本幸民、箕作秋坪らに提供、販売。また協力を依頼。販路の確保を行う一方で、基礎研究を支援（井上1958,1959,1960,1961所収の書簡）

↓

安政6年12月椋亭宛洪庵書簡：「当夏来御政事御改革に相成候故、この頃当地にても美評有之候。遂々御上之御自由にも相成り候義と奉察候」

→藩政改革の進展、椋亭の飛躍を期待

３．椋亭の足跡（３）―賛生館の設立とその機能

・文久2（1862）年、土手町（現中央区役所付近）に医学館・賛生館、大名町に附属病院を設立

「公の意は、専ら西洋医法を教授せしめんとするに意ありしも、（中略）老臣等を始めとして、旧習を頑守し、悉く漢方医を信せしもののみなれは、（中略）公も亦た其機運の未だ至らざるを察し、先づ漢洋二法を併用して、此挙を設置せられしなり」（「従二位黒田長溥公伝」）

「彼の賛生館の創設も実に椋亭が議を採用ありて爰に及びしものなり」（同）

→洪庵書簡（文久2年閏8月25日）：

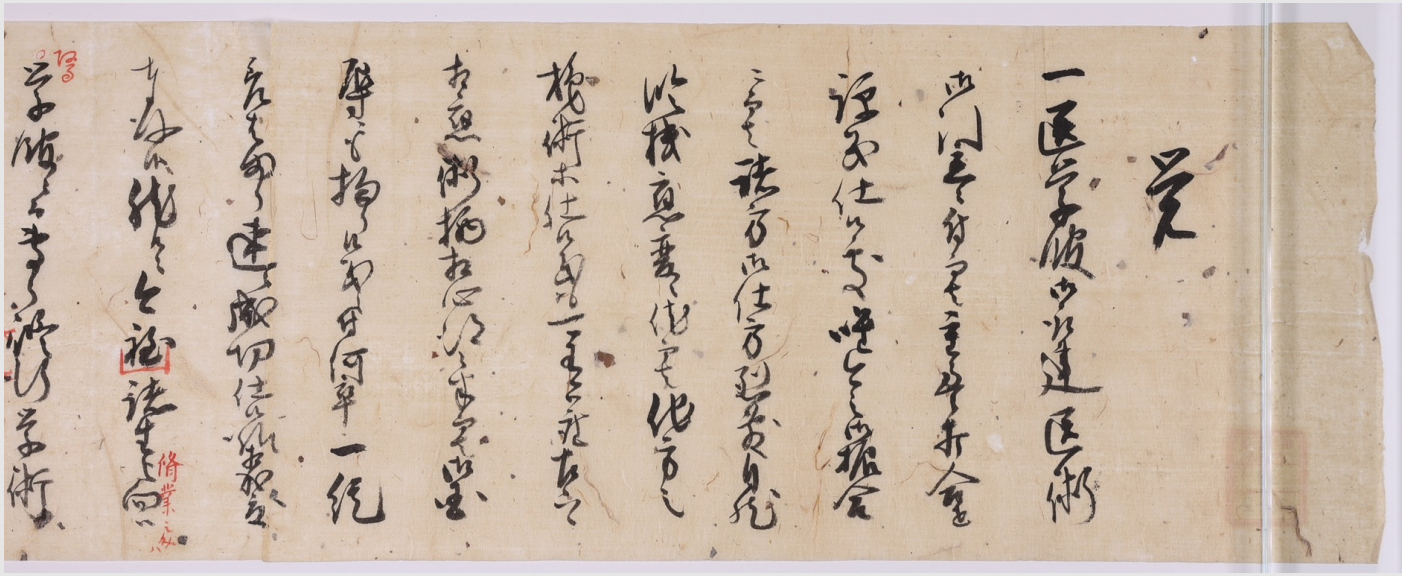
「当地も御政事大変革追々御聞取と奉存候。いづれ一時は大衰微に移り可申と奉存候。何卒此御制度大成に至るまで無事所祈に御座候。御変革に付銘々難有は西洋御採用盛に相成度の一時也」

・慶応3（1867）年春、賛生館落成

３．椋亭の足跡（３）―賛生館の設立とその機能

❖賛生館に関わる史料

・史料①「覚」（33-28-2）　医術引立受持　年不明・・・【史料50】



→「医術引立受持」から藩庁に提出された医学館（賛生館）の人材登用に関する意見書「国辱」にも関わる問題であり、在野の医師から「学術相進み居」る者を選抜したいとある

３．椋亭の足跡（３）―賛生館の設立とその機能

❖賛生館の機能

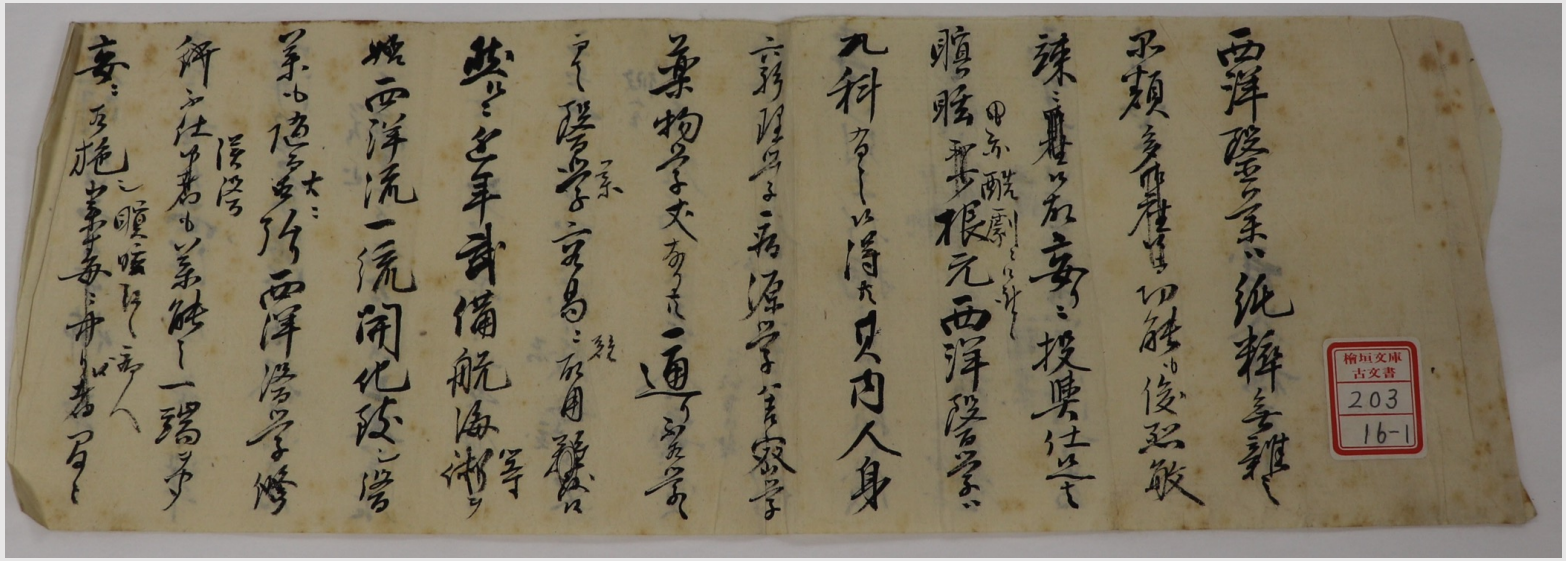
・従来の研究では医学教育と病院機能のみ注目

→「医薬行政も担う」『九州大学百年史　第1巻通史編1』

３．椋亭の足跡（３）―賛生館の設立とその機能

❖賛生館に関わる史料？

・史料②「書控」年不明（203-16-1）･･･【史料48】



→椋亭が西洋医薬の規制を求めた意見書
　西洋医学を修めていない者たちによる販売が横行

３．椋亭の足跡（３）―賛生館の設立とその機能

・史料③『賛生館御沙汰書写』（九大附属図書館付設記録資料館法制資料部門所蔵）・・・【史料49】

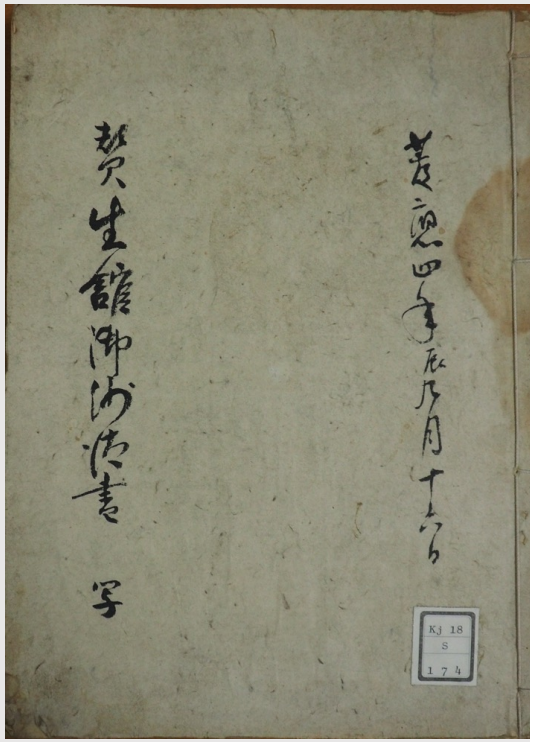
１）慶応4（1868）年9月「定」（発給時はすでに明治）

２）明治2（1869）年1月「御規定」　→１）の追加規定か

→偽薬・類似薬の氾濫、旅薬 （他藩からの行商）など販売方法等の不正（かくれ売り、押し入り、八重売り、引き抜きなど）の横行

→値引き競争の激化

⇒薬をめぐる混乱、紛争の多発により、賛生館が薬事行政を統括



３．椋亭の足跡（３）—賛生館の設立とその機能

❖参考として

・明治3（1870）年12月、「売薬取調局ヲ大学東校ニ置ク」（『太政類典草稿・第一編・慶応三年～明治四年・第二十二巻・官制・文官職制八』）

→品質効能、価格、過剰な宣伝文句、特許権等を検査の上、許可制に

→各府藩県に通達

※賛生館も類似の機能（医事薬事の統括）を保有

⇒福岡藩における医薬行政の変化、制度化：藩は組合による自主的な規制を監督する仕組みから賛生館を通じた管理へ、行政機能を強化

おわりに

❖椋亭の事績：適塾における学問と人脈を駆使し、長溥の信任を得て栄達

→2つの互恵関係

・藩主・長溥の学術的人脈、藩主主導の西洋化事業

・藩の枠を超えた蘭学人脈のさらなる広がり、それを介した人材育成、学術支援

❖椋亭の事績の意義：近代的行政制度の構築

・藩の西洋化事業を通じ、医師の枠を超えて行政官僚としての才能を発揮

→藩主導による医事・医育行政の体制を構築＝行政の組織化・合理化・機能化

・明治以降に本格化する「医学の近代化」の基盤を形成

→賛生館廃止後も福岡の医学に継承

〔主な参考文献〕

青木歳幸「種痘法普及にみる在来値」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』7、2013年

井上忠「種痘法の伝搬過程—科学文化史の一こま」『西南学院大学文学論集』３（３）、1957年

井上忠「武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介（一）—福岡藩における理化学発達の状態—」『西南学院大学文学論集』4（3）、1958年

井上忠「武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介（二）—福岡藩における理化学発達の状態—」『西南学院大学文学論集』5（3）、1959年

井上忠「武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介（三）—福岡藩における理化学発達の状態—」『西南学院大学文理論集』1（1）、1960年

井上忠「武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介—長崎医学校関係—」『九州文化史研究所紀要』8・9、1961年

井上忠「福岡藩の洋学」九州大学医学部編『七十五年史』1979年

W・ミヒェル「武谷元立・武谷祐之の父子—筑前の近代化を目指した父子」W・ミヒェル他編『九州の蘭学—越境と交流—』思文閣出版、2009年

小野忠義「肝油の産業技術史的研究（1）」『技術と文明』7（2）、1991年

芝哲夫「河野禎造と舎密便覧」『化学と教育』51（12）、2003年

武谷水城「贈従五位武谷祐之小伝」、九州大学百年史編集委員会編『九州大学百年史』第8巻（資料編1）、2014年

「従二位黒田長溥公伝」、川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『黒田家譜』第6巻（上）、文献出版、1983年

九州大学百年史編集委員会『九州大学百年史　第1巻通史編1』九州大学、2017年